

令和5年度 研究報告書

【乙立里家診療所における地域医療臨床教育研究及び出雲市における地域住民の健康増進と医療充実に関する研究】

島根大学医学部内科学講座

地方公共団体からの共同研究・受託研究に関する実施報告書

◆ 研究テーマ

乙立里家診療所における地域医療臨床教育研究及び出雲市における地域住民の健康増進と医療充実に関する研究

1. 研究開始当初の背景

出雲市乙立里家診療所は島根大学医学部の地域医療の実習の場として、これまで多くの学生や後期研修医たちが学んできた。本診療所を附属病院のサテライトとして位置づけ、各内科講座の医師(後期研修医)が現地に赴き地域住民の診療を行うとともに、時に臨床実習の一環として医学科の学生教育にもあたっていた。また、地域住民の健康増進と医療充実に将来的につながることを期待して、各内科学講座において様々な成人病における臨床像の把握や病態研究も合わせて推進してきた。

2. 研究の目的

以下の3点を目的として本年度は実施された。

- ① 出雲市の地域医療を担う人材確保と地域定着を促進するために、乙立里家診療所において主に後期研修医が地域の診療に携わりながら医療人として地域医療の現状に触れる。
- ② 地域住民の健康増進につながる生活習慣病の予防や病態解明に関する研究をおこなう。
- ③ 地域コミュニティを活性化する医療人材の育成に関する研究をおこなう。
*③の研究目的、方法、結果については別紙で報告する。

3. 実習や研究の方法

① 乙立里家診療所における診療

島根大学医学部附属病院のサテライト診療所と位置づけた出雲市乙立里家診療所へ、大学病院医師(後期研修医)が赴き、地域住民の診療に携わり、住民や医療スタッフに触れ合いながら地域医療の現状を把握する。

② 健康増進および生活習慣病の予防や病態解明に関する研究

内科学第一講座(内分泌代謝内科)、内科学第二講座(消化器内科、肝臓内科)、内科学第三講座(脳神経内科、膠原病内科)の専門領域において、臨床的・基礎的研究を計画し、成果を発表することとした(詳細な研究内容については後述)。

4. 研究成果および業績(論文・学会発表など)

① 乙立里家診療所での診療を通じて

出雲市乙立里家診療所を島根大学医学部附属病院のサテライト診療所と位置づけ、大学医師(主に後期研修医)を派遣し、地元住民の診療(外来診療)を担当した。各講座(診療科)における派遣医の担当曜日は下記である。

水曜日:内科学第一講座(内分泌代謝内科)

木曜日:内科学第二講座(消化器内科、肝臓内科)

金曜日:内科学第三講座(脳神経内科、膠原病内科)

卒後3年～5年目の後期研修医中心となって診療に携わり、地域住民の健康管理に積極的に関わっている。

令和5年4月～令和6年3月 診療科別医師派遣人数

内科学第一(内分泌代謝内科)	49人
内科学第二(消化器内科、肝臓内科)	50人
内科学第三(脳神経内科、膠原病内科)	47人
合計	146人

また、医療スタッフとのコミュニケーションを通じて地域医療現場の実態を把握した。本診療において若手医師が地域医療に直接関わることが可能となり、診療経験を通じて医療人育成にも貢献しうる機会となっている。今後は、疾病予防や健康増進に関連する講演会なども企画していくことも考慮している。

② 地域住民の健康増進および生活習慣病の予防や病態解明に関する研究

◆ 内科学講座第一(内分泌代謝内科)

他の都道府県と同様、島根県においても慢性維持透析患者数が増加していた。しかし、2019年以降、臨床的な根拠に基づいた糖尿病合併症の制御に力を入れた積極的介入を推進した結果、

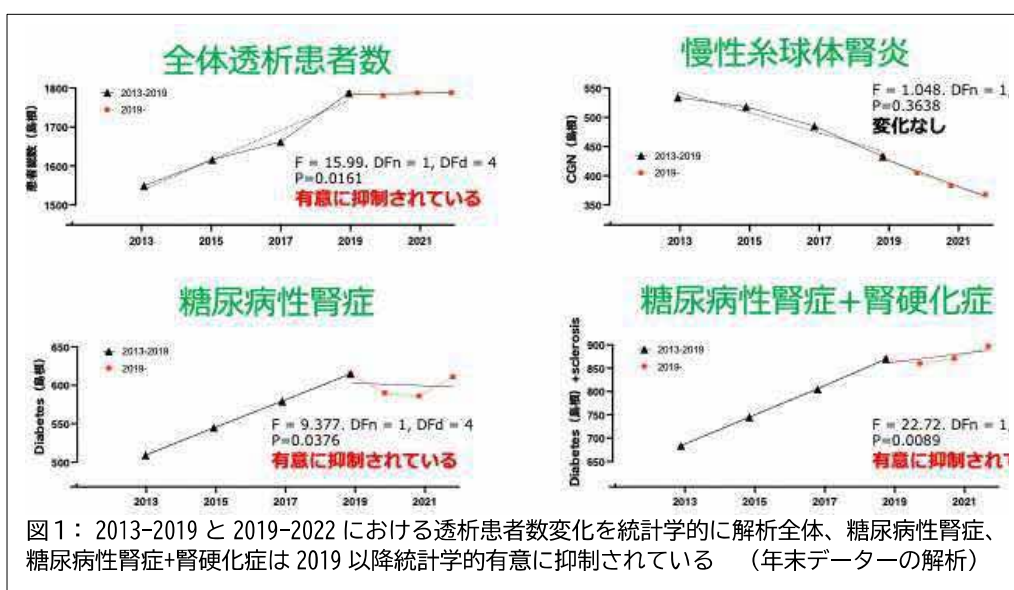


図1: 2013-2019と2019-2022における透析患者数変化を統計学的に解析全体、糖尿病性腎症、糖尿病性腎症+腎硬化症は2019以降統計学的有意に抑制されている(年末データの解析)

糖尿病性腎症に伴う透析患者の増加が抑制され、全透析患者数の増加も抑えられている(図1)。この傾向は出雲市でも確認されている。さらに、中国地方各県の人口100万人あたりの透析患者数の推移を

比較検討した結果、島根県では2019年以降に有意な増加抑制が確認されている(図2)。

今日では、SGLT2阻害薬が慢性腎臓病の進行を抑制することが広く知られている。このSGLT2阻害薬の処方についても、島根県は全国や近隣各県と比べて顕著な伸びを示している(図3)。これは、糖尿病診療における糖尿病合併症制御の理解が島根県

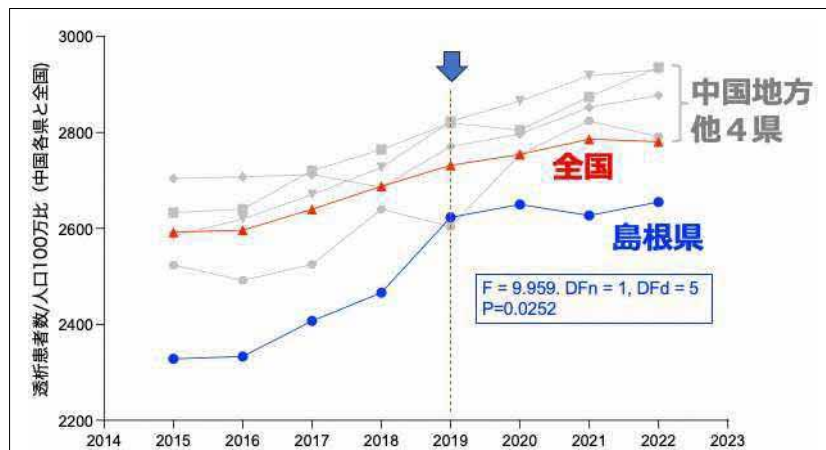


図2:中国地方では島根県のみで2019年以降、有意に透析療法患者数増加が抑制されている。

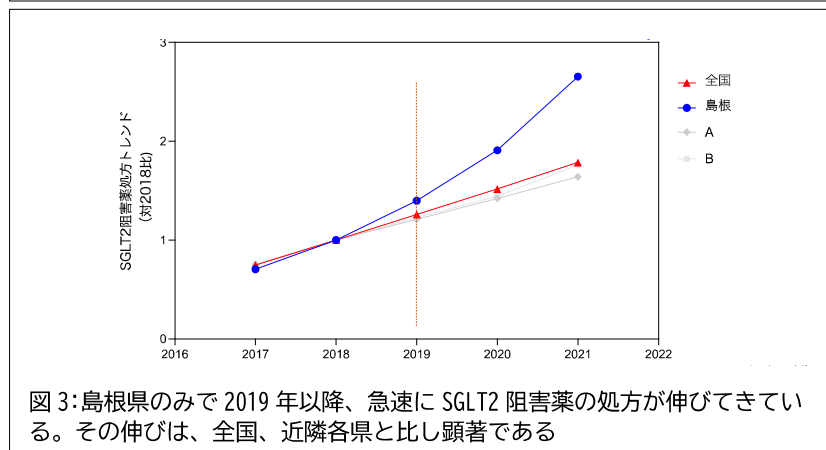


図3:島根県のみで2019年以降、急速にSGLT2阻害薬の処方が伸びてきている。その伸びは、全国、近隣各県と比し顕著である

内で大きく向上したことに関連している。また、糖尿病性腎症には非ステロイド型ミネラルコルチコイド受容体拮抗薬フィネレノンの有効性が示され、肥満症などにも効果が認められるGLP-1受容体作動薬にも同様の腎保護効果があることが明らかになった。これらの薬剤は、2019年以降、島根県で大幅な伸びを示している。これら最新のエビデンスを活用することにより、多くの症例で透析導入を著しく遅延させることが可能になっている。これを機に、県民、出雲市民の皆様と情報を交換し、糖尿病に関連する合併症の制御を推進し、糖尿病を持つ皆様の生活の質と寿命の向上を図りたいと思う。また、糖尿病を持たない皆様と同じように安心して日々を送れるようにしたいと思う。

一方で、薬剤は万能ではなく、注意深い観察が必要である。糖尿病の合併症は決して簡単に管理できる疾患ではない。ぜひ、島根県を「最新の臨床根拠に基づく適切かつ積極的な導入を通じて糖尿病を原因とする透析患者数の減少に成功し、糖尿病合併症を制圧したモデルケース」として発信したいと思う。

<発表論文>

1. Kawakita E, Kanasaki K: Cancer biology in diabetes update: Focusing on antidiabetic drugs. *J Diabetes Investig* 15: 525-540, 2024
2. Takedani K, Notsu M, Ishiai N, Asami Y, Uchida K, Kanasaki K: Graves' disease after exposure to the SARS-CoV-2 vaccine: a case report and review of the literature. *BMC Endocr Disord* 23: 132, 2023
3. Srivastava SP, Kanasaki K: Editorial: Receptor biology and cell signaling in diabetes: volume II. *Front Pharmacol* 14: 1274914, 2023
4. Otani H, Notsu M, Yamauchi M, Nawata K, Kanasaki K: Association Between Papillary Thyroid Carcinoma and Vertebral Fracture. *Horm Metab Res* 55: 592-598, 2023
5. Ogawa N, Yomota M, Notsu M, Kanasaki K: Progressive Thymic Hyperplasia With Graves' Disease: A Case Report. *Cureus* 15: e43950, 2023
6. Makino H, Kanasaki K: Epigenetic regulation of core genes linking to diabetic nephropathy progression: Lesson from FinnDiane type 1 diabetes study. *J Diabetes Investig* 14: 1341-1343, 2023
7. Kobayashi K, Toyoda M, Tone A, Kawanami D, Suzuki D, Tsuruya D, Machimura H, Shimura H, Takeda H, Yokomizo H, Takeshita K, Chin K, Kanasaki K, Miyauchi M, Saburi M, Morita M, Yomota M, Kimura M, Hatori N, Nakajima S, Ito S, Tsukamoto S, Murata ., Matsushita T, Furuki T, Hashimoto T, Umezono T, Muta Y, Takashi Y, Tamura K: Renoprotective effects of combination treatment with sodium-glucose cotransporter inhibitors and GLP-1 receptor agonists in patients with type 2 diabetes mellitus according to preceding medication. *Diab Vasc Dis Res* 20: 14791641231222837, 2023
8. Kawakita E, Yang F, Shi S, Takagaki Y, Koya D, Kanasaki K: Inhibition of Dipeptidyl Peptidase-4 Activates Autophagy to Promote Survival of Breast Cancer Cells via the mTOR/HIF-1alpha Pathway. *Cancers (Basel)* 15: 4529, 2023
9. Kanasaki K: Nutrient-derived modification of mineral corticoid receptors is relevant to diabetic kidney disease progression. *Hypertens Res* 46: 261-263, 2023
10. Kanasaki K: The aberrant glycolysis in kidney proximal tubule: potential therapeutic target for DKD. *Kidney Int* 104: 1056-1059, 2023
11. Kaku K, Nakayama Y, Yabuuchi J, Naito Y, Kanasaki K: Safety and effectiveness of empagliflozin in clinical practice as monotherapy or with other glucose-lowering drugs in Japanese patients with type 2 diabetes: subgroup analysis of a 3-year post-marketing surveillance study. *Expert Opin Drug Saf* 22: 819-832, 2023
12. Adhikari J, Hirai T, Kawakita E, Iwai K, Koya D, Kanasaki K: Linagliptin ameliorated cardiac fibrosis and restored cardiomyocyte structure in diabetic mice associated with the suppression of necroptosis. *J Diabetes Investig* 14: 844-855, 2023

◆ 内科学講座第二(消化器・肝臓内科)

➤ 消化器病に関する臨床的・基礎的な研究

内科学第二講座は消化器内科、肝臓内科を担当し、胃腸、胆膵、肝臓に関する診療に携わっている。消化器内科の疾患は地域の診療の中でも頻度が高く、扱う疾患としては腹痛や便秘異常などの日常的な症状を呈する疾患から難病まで多岐に渡っている。我々は地域医療の中でも認められるような疾患を対象として、消化器全般の診療と高度医療を推進し、地域住民の疾病予防や診療、病態解明を目指す研究を行っている。

2023年度に論文発表した内容(主に消化管と肝臓)は、消化器病の疫学、診断や治療に関する臨床的な研究、疾患の病態解明を目標とした研究などであり、様々な視点から消化器病学の研究を行っている。最近では、便秘異常や腸管炎症に関連するリーキーガットの病態に興味を持ち、特にリンパ球などの免疫系による腸管粘膜透過性の制御機構について研究を進めている(現在も進行中)。

- 胃癌(腫瘍)の病態に関する研究(論文 1-4)
- 炎症性腸疾患、機能的消化管疾患、好酸球性消化管障害(食物アレルギー)に関する研究(論文 5-11)
- 生活習慣病である非アルコール性脂肪性肝疾患に関する研究(論文 12)

<発表論文>

1. Shibagaki K, Ishimura N, Kotani S, Fukuyama C, Takahashi Y, Kishimoto K, Yazaki T, Kataoka M, Omachi T, Kinoshita Y, Hasegawa N, Oka A, Mishima Y, Mishiro T, Oshima N, Kawashima K, Nagase M, Araki A, Kadota K, Ishihara S: Endoscopic differential diagnosis between foveolar-type gastric adenoma and gastric hyperplastic polyps in *Helicobacter pylori*-naïve patients. *Gastric Cancer* 26: 1002-1011, 2023
2. Kotani S, Shibagaki K, Hirahara N, Hasegawa N, Tanabe R, Ebisutani Y, Nonomura S, Kishimoto K, Kodama Y, Takahashi Y, Kataoka M, Oka A, Fukuba N, Mishima Y, Oshima N, Kawashima K, Ishimura N, Araki A, Kadota K, Itawaki A, Nagasaki M, Miyaoka Y, Onuma H, Ishihara S: Clinicopathologic differences of gastric neoplasms between *Helicobacter pylori*-infected and -naïve patients: a multicenter retrospective analysis. *J Gastroenterol* 59: 1-10, 2023
3. Sakamoto U, Adachi K, Kishi K, Okimoto E, Ishimura N, Miura H, Ishihara S: Prevalence of raspberry-type gastric foveolar-type tumor in individuals undergoing medical checkups. *Intern Med* 62(19): 2775-2781, 2023
4. 柴垣広太郎, 三代 剛, 岡 明彦, 荒木亜寿香, 石原俊治:【ピロリ菌未感染胃粘膜に発生する種々の疾患】ピロリ菌未感染胃粘膜に発生する腺窩上皮型胃腫瘍. *消化器内科* 5(1): 53-59, 2023
5. Oka A, Kawashima K, Kishimoto K, Kotani S, Fukunaga M, Fukuba N, Mishima Y, Oshima N, Ishimura N, Awoniyi M, Ishihara S: Validation of rapid fecal calprotectin assay using

- particle enhanced turbidimetric immunoassay for inflammatory bowel disease. *Sci Rep* 14: 1653, 2024
6. Oshima N, Hiraoka S, Hayashi R, Takahashi S, Ishii M, Hashimoto S, Yashima K, Igawa S, Inokuchi T, Ueno Y, Inaba T, Matsumoto H, Kawashima K, Takami T, Isomoto H, Shiotani A, Tanaka S, Ishihara S: Predictive Factors for efficacy of oral tacrolimus induction therapy in moderate to severe ulcerative colitis patients: large multicenter retrospective cohort study. *Inflamm Bowel Dis* 2023 Aug 19:izad150. doi: 10.1093/ibd/izad150. Online ahead of print. PMID: 37598298
 7. 石原俊治, 三島義之, 岡 明彦:【慢性下痢を深く理解する!】過敏性腸症候群の疫学と診断. *IBD Research* 17(2): 102-106, 2023
 8. 石村典久, 石原俊治:【臨床に必要な消化管アレルギー疾患】好酸球性消化管疾患 病態と臨床経過. *臨床消化器内科* 38(6): 640-646, 2023
 9. 石原俊治, 石村典久: 指定難病最前線(Volume 139) 好酸球性消化管疾患. *新薬と臨床* 72(5): 411-415, 2023
 10. 石村典久, 石原俊治:【臨床に必要な消化管アレルギー疾患】好酸球性消化管疾患 病態と臨床経過. *臨床消化器内科* 38(6): 640-646, 2023
 11. 三島義之, 岡 明彦, 石原俊治:【IBDの謎を科学する】炎症性腸疾患の病態におけるB細胞の謎を科学する. *消化器病サイエンス* 8(1): 31-34, 2024
 12. Tobita H, Sakai H, Yamaguchi A, Botsu Y, Kataoka M, Yazaki T, Nabika T, Ishihara S, Kobayashi H: Association of lysophosphatidic acid molecules with liver fibrosis: different roles indicated. *J Clin Biochem Nutr* 73: 255-261, 2023

◆ 内科学講座第三(脳神経内科)

脳血管障害、認知症、認知機能に関する研究

内科学第三では、年間を通して乙立診療所における地域医療研修を行い、地域で生活する高齢者と出会いながら、地域医療の問題点を浮き彫りにするとともに、治療や地域住民への啓発を通して、医療充実に対する方策を検討している。

そのような経験から、高齢化社会が進行する現代において、脳血管障害や認知症の罹患が生活の質の低下させていることを鑑み、地域住民が健やかに高齢まで生活できる社会を目指して、乙立診療所での診療を行い、乙立地区を含めた出雲地域の地域住民を対象とした脳ドックの推進により、その成果を地域住民に還元して健康の延伸をおこなっている。このような研究の推進は地域住民の健康増進を行いながら、地域医療の人材確保への対策にも貢献できている。2023年度の取組みについて報告する。

脳ドックでは、地域の健常な方を対象に経時的に受診を頂くことで、脳卒中のリスク因子の解析を行っている。代表例として論文1(投稿中)にあるように、これまで蓄積してきた脳ドック検査データ、MRI画像データを元に、アンケート調査による経年的な追跡調査を加えている。アルツハイマ

一病発症予測する深層生存分析モデル(DSA)を開発し脳ドックを受検する方に結果を還元しているが、この分析では構造 MRI 画像から灰白質体積の情報を抽出し、深層学習と生存分析を組み合わせてアルツハイマー型認知症(AD)の発症時期と確率を予測する機械学習モデル(DSA)を開発し、AD の早期発見技術の社会実装を目指している。今回は認知症リスク検査の精度を検証するため、2015 年 1 月から 2021 年 12 月までにヘルスサイエンスセンター島根にて脳ドックを受検し、本研究への参加に同意した 1,796 名のうち、初回検査の時点で 50 歳以上で、1 年以上の間隔をあけて 2 回検査を受けた 113 名を対象として解析を実施した。結果として、113 名の対象者の脳 MRI 画像(T1 強調画像、スライス厚 1mm、矢状断)を解析し、DSA スコアを算出し、DSA=0.25 を閾値として低リスク群、高リスク群に層別化し、初回の各種認知機能検査について群間比較を行った。初回検査では両群間の有意差は見られなかった(表 1)。

表1. 認知症発症低リスク群、高リスク群の基本プロフィール

Item	Low Risk	High Risk	Difference	P-value*
N	77	36	-	
Age (Average, SD)	67.1, 6.9	67.8, 8.6	0.7	0.829
Sex (Male: Female)	48: 29	27: 9	-	-
MMSE (Average, SD)	28.6, 2.2	28.7, 1.5	0.1	0.319
Okabe (Average, SD)	46.1, 7.0	44.4, 6.6	-1.7	0.153
Kohs (Average, SD)	106.5, 18.3	102.5, 17.4	-4.0	0.208
FAB (Average, SD)	16.6, 1.1	16.6, 1.6	0	0.506
Interval (Average, SD)	1080, 444	1189, 452	109	0.23

次に、低リスク群、高リスク群の 2 回目の各認知機能検査について群間比較を行った。高リスク群で MMSE が有意に低下し、岡部式簡易知的評価尺度、Kohs 検査でも 10%の有意な低下が認められた(表 2)。

表2. 認知症発症低リスク群、高リスク群の認知機能テストの推移

Item	Low Risk	High Risk	Difference	P-value*	Cohen's d
N	77	36	-	-	-
Age (Average, SD)	70.1, 6.8	71.0, 8.6	0.9	0.755	-
Sex (Male: Female)	48: 29	27: 9	-	-	-
MMSE (Average, SD)	28.9, 1.8	28.4, 2.1	-0.5	0.049	0.285
Okabe (Average, SD)	46.8, 6.4	44.5, 6.0	-2.3	0.060	0.374
Kohs (Average, SD)	105.8, 18.2	99.5, 19.2	-5.3	0.069	0.342
FAB (Average, SD)	16.9, 4.1	16.5, 1.2	-0.4	0.331	0.127

その他、地域健診で得られたデータを元に健康推進を計るべく、臨床および基礎研究に取り組んでいる。

- ・ 高血圧に加えて脂質異常症などのメタボリック症候群の存在がいかに脳動脈硬化に影響を及ぼすか検討した(論文 2)。
- ・ 認知症には脂質代謝異常との関連が推定されるため、高次機能と関連するといわれるプラズマローゲンの測定法を開発し、アルツハイマー病モデルマウスで実際に測定した結果を報告した(論文 3)。今後、健診や脳ドックの検体で測定して、認知症との関連性を検討していく予定である。
- ・ 現在認知症新規治療薬の対象となっている軽度認知障害の患者を対象に、脳誘発電位の特徴を分析し、早期発見などのツールとしての可能性を考察した(論文 4)。
- ・ また、新たな動脈硬化の候補因子として、trimethylamine-N-oxide (TMAO)を住民健診のデータより明らかにした(論文 5)。

〈発表論文〉

1. Kato Y, Takamura M, Wada K, Usuda H, Abe S, Mitaki S, Nagai A: *Fusobacterium* in oral bacteria flora relates with asymptomatic brain lesions. 2024(投稿中).
2. Zhang Y, Sheikh AM, Tabassum S, Iwasa K, Shibly AZ, Zhou X, Wang R, Bhuiya J, Abdullah FB, Yano S, Aoki Y, Nagai A: Effect of high-fat diet on cerebral pathological changes of cerebral small vessel disease in SHR/SP rats. *Geroscience* 2024. doi:10.1007/s11357-024-01074-7
3. Haque MA, Omori N, Sheikh AM, Yano S, Osago H, Mitaki S, Azad AK, Sakai H, Michikawa M, Nagai A: Analysis of the time-dependent changes of phospholipids in the brain regions of a mouse model of Alzheimer's disease. *Brain Research* 1800: 148197, 2023
4. Abe S, Onoda K, Takamura M, Nitta E, Nagai A, Yamaguchi S: Altered feedback-related negativity in mild cognitive impairment. *Brain Sci* 13: 203, 2023
5. Bhuiya J, Notsu Y, Kobayashi H, Shibly AZ, Sheikh AM, Okazaki R, Yamaguchi K, Nagai A, Nabika T, Abe T, Yamasaki M, Isomura M, Yano S: Neither trimethylamine-n-oxide nor trimethyllysine is associated with atherosclerosis: a cross-sectional study in older Japanese adults. *Nutrients* 15(3): 759,2023

〈学会発表〉

6. 朝山康祐, 上田真大, 青木慶仁, 有竹 洵, 岩佐憲一, 金井由貴枝, 高村真広, 安部哲史, 三瀧真悟, 長井 篤: 無症候性脳梗塞および大脳白質病変とアディポネクチンの関連性. 第 64 回日本神経学会学術大会, 千葉, 2023.5.31
7. 高村真広: AI を用いた認知症予知システム構築の取り組み. 第 64 回日本神経学会学術大会, 千葉, 2023.6.1
8. Takamura M, Nagai A et al.: Domain-specific association between brain volumes and reaction times in a dementia screening test. IAGG-AOR 2023, Yokohama, 2023.6.13
9. 長井 篤, 高村真広, A Garu, 金井由貴枝, 朝山康祐, 安部哲史: 漢方指標: 気虚・気うつと脳ドック指標の関連性. 第 65 回日本老年医学会学術集会, 横浜, 2023.6.17
10. 高村真広, 金井由貴枝, 岩佐憲一, 朝山康祐, 安部哲史, 三瀧真悟, 石田 学, 黒田陽子,

- 長井 篤: 認知症簡易スクリーニング検査 CADi2 遂行時間と海馬体積の関連. 第 65 回日本老年医学会学術集会, 横浜, 2023.6.17
11. 大森直樹, 石田 学, 高村真広, 堺 弘道, 長井 篤: 脳ドック受診者における血中リゾリン脂質と脳委縮の関連性. 第 32 回日本脳ドック学会総会, 盛岡, 2023.6.23
 12. 石田 学: 認知機能の低下を予測する機械学習モデルの開発. 第 32 回日本脳ドック学会総会, 盛岡, 2023.6.23
 13. 岩佐憲一: 認知症心理検査における所要時間は無症候脳病変の予測に有用か. CADi2 を用いた検証. 第 49 回日本脳卒中学会学術集会, 横浜, 2024.3.
 14. 石田 学: 認知症リスク検査と脳画像解析. 2023 年度日本放射線技術学会中国・四国支部セミナー, 出雲, 2024.1.27

島根大学医学部、出雲市乙立里家診療所及び出雲市全域における
地域コミュニティを活性化する医療人材の育成

成果報告書

一般社団法人Community Nurse Laboratory

2024年3月

<目次>

1. 活動成果のサマリー
2. 詳細報告
 - (1)活動目的
 - (2)活動期間
 - (3)実施主体
 - (4)活動内容
 - (5)活動実績

1. 活動成果のサマリー

■活動目的とスコープ

一般社団法人Community Nurse Laboratory(以下、当法人)は、地域コミュニティを活性化
化する医療人材を育成することを主目的として、昨年度より島根大学との協働を開始した。

活動2年目となる今年度は、以下2点をスコープとして実施した。

- | |
|---|
| (1) 地域コミュニティを活性化する医療人材育成プログラムの企画・設計
(2) 島根大学医学部生へのプログラムの提供及び調整 |
|---|

■活動内容

(1)においては、今回2種類のプログラムを企画・設計した。

1つめは、地域コミュニティの中で地域の一員として学生が課題解決に主体的に取り組む
地域探究プログラムを、新たな人材育成プログラムとして地域住民及び医学部と共同で設
計した。

本プログラムでは、

- ・学生自身がどんなことに興味や関心をもち情熱を注げるのか、自分はなにができるのか
を探究する経験をすること(自己探究)
- ・自分の関心や情熱と地域に求められていること(課題)の接点から自分らしい地域実践に
挑戦すること(マイプラン実践)

を基軸要素として到達目標を設定し、講座形式の事前学習とフィールドワーク形式の地域
実践をコミュニティナースの支援と伴走のもと行った。

【プログラム到達目標】

- | |
|---|
| ①コミュニティナーシングの特徴的な視点やアプローチを理解できる
②住民に自らファーストコンタクトをとれる
③自分の興味関心・情熱の軸を太くして、仲間や地域で住民と一緒に活動できる |
|---|

2つめは、地域コミュニティでの実践に興味/関心をもつ学生の増やすための取り組みとして、コミュニティナーシング実践プログラムを昨年度の改善点をふまえて改良し、新たな人材発掘プログラムとして地域住民及び医学部と共同で設計した。

本プログラムでは、

- ・参加する医学生が「医療者と患者」という関係性で出会う病院実習と比較し、「一住民として」地域住民と関係づくりをする経験をする(住民経験)
- ・コミュニティナーシングの活動現場に同行し、住民とのコミュニケーションを観察した後、自らも実践し住民との会話を通じてつづやき(真の願い)を拾うことに挑戦すること(アクティブリスニング)

を基軸要素として到達目標を設定し、フィールドワーク形式の地域実践とディスカッション形式の振り返りをコミュニティナーシングの支援と伴走のもと行った。

【プログラム到達目標】

- ①暮らしの中で1人の住民として地域の住民と出会い、関係構築できる
- ②住民のつづやき(願い)を拾うことができる
- ③地域や住民の方々を好きになる

(2)においては、(1)で設計したプログラムにおいて

地域探究プログラムは高校生や大学生を対象に19名に半年間継続的に行い、マイプランの実践を複数回行うことができた。実践活動地は、各参加者が決定し出雲市を中心に行った。

コミュニティナーシング実践プログラムを島根大学医学部生対象に全5回、合計18名を受け入れ、コミュニティナーシングの体験・実践を行うことができた。

実践活動地は、乙立や佐田等の中山間地域を含む出雲市全域と当法人の中山間地域モデルの活動拠点で行った。

■活動成果と今後に向けた提言

○活動成果

地域探究プログラムでは、高校生や大学生を対象に19名に実施し行政や地域の協働者との振り返りを通じ、全員が到達目標を達成することができた。内、島根大学医学部学生7名、島根大学生物資源科学部学生1名が参加した。今回の参加者の中には、他県進学を決めていた高校生が島根大学への進学を決める、他県大学在籍中の出雲市出身の大学生が出雲市へUターンし島根大学への転学を決めるといった事象が起きた。本プログラムの導入時には、地域での振る舞い方やマインドセットのトレーニングだけでなく、出雲市医療の現状や取り組みに関して把握し、いまの自分にできることを考える機会提供を行った。これにより、自分の住んでいる地域の現状がわかり「いつか」ではなく「いま」行動を起こすことが重要だということに気づいたことが影響していたと考える。また、マイプランを実践することで得た相手からの反応や実践したからこそわかる気づきを関係者とともに振り返り、改善するためにどうするのかを考え、繰り返し実践していくことの重要性に気づくことができたのは大きな成果と考える。

そのほか、参加学生からの学びの共有からみえる学習・成長のポイントは以下が挙げられる。

- ・相手のことを聞くことから協働は始まるとわかった。協力と協働が違うことがわかったのは大きい。
- ・自分に自信を持つこと、他者からの信頼を得るために、自分の行動を変えたい。またそれを後押ししてほしい。
- ・同世代、多世代での出会いが知力に、行動力になった。自分が描く未来、期待する社会の解像度が上がった。

コミュニティナーシング実践プログラムでは、島根大学医学部6年生の救急科実習を選択している学生対象に全5回、合計18名を受け入れ、全員到達目標に達成することができ、内3名は地域実践に興味をもちその後も継続的に関係性をもっている。

実践活動地として、乙立や佐田等の中山間地域へ出向き、地域の住民の健康に寄与している取り組みや活動を実際に体感することで、医療現場からみた医療人材にしかできないことに視点をおくのではなく、日常の暮らしの中で地域の住民だからこそできることやわかることがあるということやその違いに気づくことができたのは大きな成果だと考える。本プログラムでは、学生が病院実習では経験することのない地域内で起きている自主的な活動（例えば、コーヒー会、体操サロン等）に住民と共に取り組み、会話を通じてその人のつぶ

やき(願いやニーズ)を拾う機会をもち、そのアウトプットの機会(まちの保健室での出店)をもてるように設計している。「なぜこの住民は(仕事でも、誰かに頼まれたわけでもない)コーヒー会を主催しているのか?」「なぜ毎身体操サロンに参加しているのか?」会話の中でそうした疑問を抱き、その人の暮らしに目を向けてみると、その人が望む生活を送るために、どんな思いで何を大切に暮らしているかが見えてくる。そうした想像力が湧いてきたことが大きな成果である。

そのほか、参加学生からの学びの共有からみえる学習・成長のポイントは以下が挙げられる。

- ・日々の暮らしの中で楽しい・生きがいといったウェルビーイングをつくっていく、支えていく役割や行動は、特定の資格や職業でなければできないことではないと分かった。
- ・地域の方とのお茶会で分からないことや知らなかったことを素直に尋ねることで話が広がったり、教えることを楽しいと思ってくれる人いて、これからもコミュニケーションをする上で臆せずに質問していこうと思う。
- ・病気を治すと言うことより高位にある患者にとっての健康とは何なのかという問題について、まちの人の暮らしや人付き合い、笑顔の中に自ら入っていくことで肌で感じ、その意味を考えることができた。

○今後に向けた提言

今回のプログラムに参加することで学生が個々でアイデアを考え、自らのアイデアを実践する機会を提供することができた。学生たちがコミュニティナーシング(CNing)を学び、実践するなかで、学生自身の行動や考え方にポジティブな変化が生まれたのみならず、地域コミュニティをも活性化するものであるということが明確になった。

CNingの実践にあたっては、「より主体的に参加する姿勢のセッティング」と「実習における偶然性を大切にすること」が重要である。

・より主体的に参加する姿勢のセッティング

参加学生が実習を「受ける」という姿勢ではなく「自ら学びを掴んでいく」というマインドを持ちやすいように、本プログラムを実施する背景や目的の明確化や、自身のふるまいについて、CNingの実践家からタイムリーにフィードバックを受ける機会の提供を行った。なかでも、学生がCNingを実践する前段階として、地域の方々から「おせっかい」(一種のCNing)を受ける機会を設けることが効果的であった。

例えば、住民と会話する場で、自ら話しかけなくても地域住民の方から会話の輪のなかに入れてもらえたり、話を引き出してもらったりする機会が、その後のCNINGの実践に効果的である。

故に、「おせっかいな住民」と日常的に関わる機会を若者世代に作ることが肝要。

・実習における偶然性を大切にする

実習のなかでの出会いや学生本人の学び、「やってみたい」という思いを最大限大切にするため、事前に設計したプログラムの内容に固執しすぎないことが重要である。

人と人のコミュニケーションの方法をトライ&エラーのなかで学び取っていくことが目的の1つでもあるため、コミュニケーションの結果生まれたイベントや、「やってみたい」と突発的に思ったことを実践することを試させてあげることが、結果的に学生本人のプログラムに対する積極性や、学びの深化につながる。

2. 詳細報告

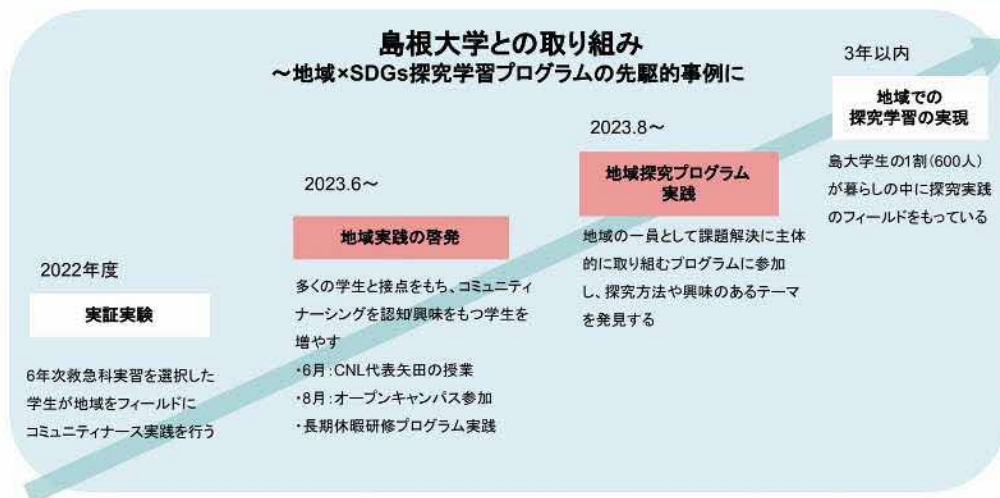
(1) 活動目的

本活動では、大学生を中心とした若者世代を対象として、地域コミュニティを活性化する医療人材を育成することを目的とする。(参考:地域まるごとキャンパス)

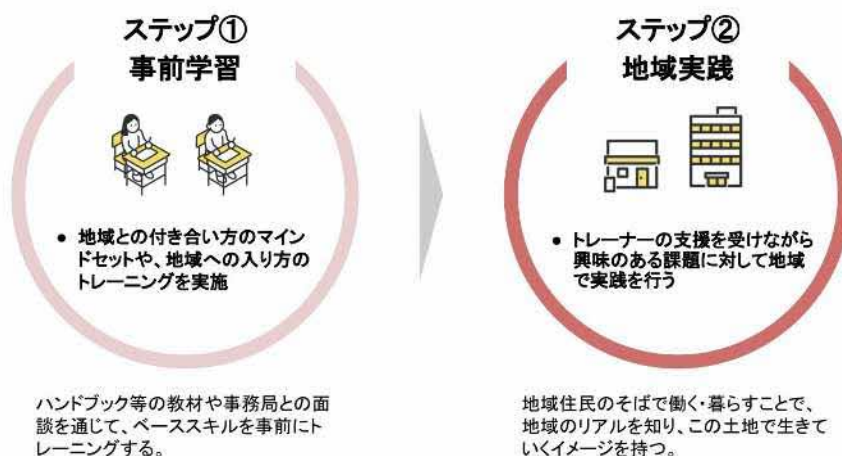
地域まるごとキャンパスとは

目的	人として成熟した、地域コミュニティを活性化する若者および医療人材を育成する
主な活動	参加する若者(ユース)が、コミュニティ地域の人との対話や経験を通じて学ぶプログラムを企画・運営する
目指す状態	地方国立大学だからこそできる SDGs探究学習プログラムの先駆的事例となる

地域まるごとキャンパスのロードマップ



学生が取り組む実践の2ステップ



(2)活動期間

2023年6月1日～2024年3月31日

(3)実施主体

一般社団法人Community Nurse Laboratory（代表理事：矢田明子）

(4)活動内容

- (1)地域コミュニティを活性化する医療人材育成プログラムの企画・設計
- (2)島根大学医学部生へのプログラムの提供及び調整

(5)活動実績

- (1)地域コミュニティを活性化する医療人材育成プログラムの企画・設計
 - ①出雲市を中心とした地域の課題解決に探究しながら取り組む人材育成
 - ②コミュニティナースの現場でのフィールドワーク・実践を通じた人材発掘

■プログラム概要

- ①出雲市を中心とした地域の課題解決に探究しながら取り組む人材育成

■コンセプト

- ・学生自身がどんなことに興味や関心をもち情熱を注げるのか、自分はなにができるのかを探究する経験をすること(自己探究)
- ・自分の関心や情熱と地域に求められていること(課題)の接点から自分らしい地域実践に挑戦すること(マイプラン実践)

■実施場所

島根県出雲市、雲南市

■期間

2023年7月29日～2024年2月24日

■プログラム到達目標

- ①コミュニティナーシングの特徴的な視点やアプローチを理解できる
- ②住民に自らファーストコンタクトをとれる
- ③自分の興味関心・情熱の軸を太くして、仲間や地域で住民と一緒に活動できる

■カリキュラム

日程	実施内容
2023年7月29日 /9月23日	第1回講座 ・コミュニティナーシングとは(講義形式) ・出雲市医療の現状と取り組み(講義形式) ・アクティブリスニングのワークショップ(実践形式)
2023年11月11日	第2回講座(中間報告会) ・マイプラン実践の進捗状況の報告とブラッシュアップ (行政や地域の協働者の方々も同席のもと)
2024年2月24日	第3回講座(最終報告会) ・マイプラン実践報告と学びの共有 (行政や地域の協働者の方々も同席のもと)

2023年8月21日/9月16日/10月21日/12月16日/2024年1月20日	<p>月次共有会(対面)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・マイプラン実践の進捗状況の報告とブラッシュアップ (毎回違う地域の協働者に同席いただき多角的な視点からフィードバックを提供する) ・メンタリング(担当トレーナーが実践状況に応じて)
2023年10月28日/12月17日	<p>月次共有会(オンライン)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・同上
2023年8月29日/8月30日/9月10日/10月22日/10月29日/11月25日/12月9日/12月23日	<p>マイプラン実践促進支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域住民対象イベントの企画/実施 ・地域住民対象振り返り会の企画/実施 ・ワークショップの企画/実施

■実際の様子



第1回講座で出雲市の医療の現状と取り組みについて講義を受ける様子



左)子ども縁日というマイプラン実践のために準備する様子

右)月次共有会で地域の方にマイプランの相談をしている様子



地域の行事(おろち踊り)に参加しマイプラン実践している様子



地域住民とともにこども食堂のマイプラン実践をしている様子

■プログラム概要

②コミュニティナースの現場でのフィールドワーク・実践を通じた人材発掘

■コンセプト

- ・参加する医学生が「医療者と患者」という関係性で出会う病院実習と比較し、「一住民として」地域住民と関係づくりをする経験をする（住民経験）
- ・コミュニティナースの活動現場に同行し、住民とのコミュニケーションを観察した後、自らも実践し住民との会話を通じてつづやき（真の願い）を拾うことに挑戦すること（アクティブリスニング）

■実施場所

島根県出雲市、雲南市

■期間

各回4日間(住民調整の都合により変動あり)

■プログラム到達目標

- ①暮らしの中で1人の住民として地域の住民と出会い、関係構築できる
- ②住民のつぶやき(願い)を拾うことができる
- ③地域や住民の方々を好きになる

■カリキュラム(ある回の例)

日程	実施内容
事前オリエンテーション	<ul style="list-style-type: none">・顔合わせ・プログラムの趣旨と内容の説明
DAY1	AM <ul style="list-style-type: none">・乙立地区担当保健師同伴のもとすこやか常会へ参加する・コミュニティナースとまめなかねの会へ参加する PM <ul style="list-style-type: none">・乙立コミュニティセンター長さんのお話をきく・コミュニティナースを交えた学びの共有と振り返り
DAY2	AM <ul style="list-style-type: none">・月1回交流センター主催の高齢者対象「いちにこカフェ」へ住民のひとりとして参加して交流する PM <ul style="list-style-type: none">・地域おせっかい会議に参加し、テーマ発案者のやってみたいことや困りごとに自分はどんな助けや関わりができるのか考える機会をもつ・コミュニティナースを交えた学びの共有と振り返り
DAY3	AM <ul style="list-style-type: none">・地域の方が主催しているコーヒー会に参加して交流をもつ PM <ul style="list-style-type: none">・まちの保健室のブース出店にあたりコンテンツ内容を地域の住民

	と相談しながら考え準備する ・コミュニティナースを交えた学びの共有と振り返り
DAY4	・郵便局長が中心で開催しているまちの保健室に自分たちで考えたコンテンツでブースを出店を行う ・コミュニティナースを交えた学びの共有と振り返り

(2) 島根大学医学部生へのプログラムの提供及び調整

■活動実績

①地域実践プログラムへの参加日程/人数

	日程	人数	実施内容
1	6月5日～8日	3名	・オリエンテーション ・コミュニティナース現場体験 ・コミュニティナース実践 ・学びの共有(プレゼンテーション)
2	7月11日～14日	4名	同上
3	1月16日～19日	4名	同上
4	2月19日～22日	4名	同上
5	3月12日～15日	3名	同上
合計		18名	



地域の方より昔の遊びを教えていただきまちの保健室のコンテンツ決めの様子



子育て世代の地域住民の困りごとをアクティブラスニングしている様子



地域の方主催のコーヒー会に参加してコミュニティナース実践している様子



まちの保健室でブース出店している様子

■参加学生からの気づき・学びのコメント(匿名での抜粋)

<地域住民との関係構築や実践の中での気づき・学び>

- ・余計なことを考えずにまずは自己紹介をして話しかけてみる。
- ・自分の名前をまず知ってもらって、相手の名前も聞く。自分をだしていく。
- ・地域の方との共同作業を通じて、その前提である環境が当たり前のものでなくその環境を作り出すことが難しいことに気づいた。
- ・人の気持ちを考えておせっかいするためには、まずその人のことや背景を理解することが大切だと学んだ。
- ・相手の背景を知るためには、その人の背景をつくる環境や地域に関する知識も一緒に学ぶ必要があると感じた。
- ・人が集まる場所に元気と知恵がうまれていく様子をおせっかい会議から感じた。
- ・自分のもっていたデイサービスと実際のデイサービスの現状に乖離があることがわかった。人材不足や望むケアを受けることができないことも問題であるが、自分には関係ないところかと思っていた。医療を担うものとしてこの問題を知っていることは重要なことだと感じた。

<自身の姿勢・キャリアに対する気づき>

- ・参加する前と後では地域に対する考え方は大きく変わった。自分の心地よい環境に甘んじることなく、まず参加してみる、誘われたら行ってみるを今後も心がけてみようと思った。
- ・社会的な健康が大事だと頭ではわかりつつも、自分自身は何もできていなかったとわかった。勉強や部活も大事だが、それ以外の繋がりをどう作っていくのか考える機会になった。
- ・患者に寄り添い思いやりをもつことがただ単に丁寧に接する、共感するというだけではなく、相手を信じること、相手の大事にしたいものを一緒に大事にすることだとわかった。
- ・医師として病院にいる時間が多くなっても、この実習で得たスキルや経験を忘れないで「病」ではなく「人」に意識を向けていけるようにしていきたい。
- ・相手に興味をもって意識的に関わっていきたい。
- ・デイサービスや介護保険の制度にとらわれずに、その人がそのひとらしい生活を送ることができているのかを配慮できるような医療者になりたい。
- ・相手の変化に気づけるように日頃から相手のことを「みる」コミュニケーションをとることが大切である。